

春日井建百首

大塚寅彦 選



春日井 建

大空の斬首ののちの静もりか没^{おぼ}ちし日輪がのこすむらさき

太陽が欲しくて父を怒らせし日よりむなしきものばかり恋ふ

童貞のするとき指に房もげば葡萄のみどりしたたるばかり

白球を追ふ少年がのめりこむつめたき空のはてに風鳴る

火の剣のごとき夕陽に跳躍の青年一瞬血ぬられて飛ぶ

与へあふいのちなき夜のわれのため彫られてありシラオコートの像

海鳴りのごとく愛すと書きしかばこころに描く怒濤は赤き

春潮の底にわが影かがやくと白き波頭をくぐりて泳ぐ

星宿の下いきいきと訪ひゆくに与ふべきものはこころの何処^{いづこ}

〔未青年〕

唇びるに蛾の銀粉をまぶしつづ己れを恋ひし野の少年期

星落ちて宇宙組織の脱落者のわれのみならぬことを哀しむ

両の眼に針射して魚を放ちやるきみを受刑に送るかたみに

男因のはげしき胸に抱かれて鳩はしたたる泥汗を吸ふ

帰りゆくきむき部屋には抱くべき腕さへもたぬ胸像^{トルソイ}が待つ

火祭りの輪を抜けたる青年は霊を吐きしか死顔をもてり

幻視とはわれは思はず凍空より樹より脱走する血を見たり

遙かなるわが祖^{オジ}は男巫^{オシ}ならむ曠^い悲^かれば罪々として雪が降る

われよりも烈しきものに打たれたく風哭く冬の夜をさまよへり

〔夢の法則〕

ジイドよわれは情熱を欲る日もすがら金いろの裸麦に埋れて

水脈^みひきて走る白帆や今のいまわが肉体を陽がすべりゐる

わが歓喜告ぐべきひとと帆を繰りし日は暮れ初めつ青潮のうへ

純潔の時はみじかく過ぎ去らむわれに透過光するとき汀

白兔消ゆ山に出会ひしつかのまの冷ゆる微光を忘れざるべし

遅しく草の葉なびきし開拓地つねに夜明けに男根は立つ

「行け帰ることなく」

革命よりガラスの玉を愛すれば生きのびて寒し市民ケーンも

目つむりてミコを語れば宇宙塵つめたく光りわれらの時代

花鞭をふるふわかも熱ばめりけものを刃尖の前に追ひつ

蒼白く瞳孔ひらきて発光す死なば見者の眼をなべて持つ

花の管また人体の神経図ひらきて母を恋ひし日はるか

ひとしれず罪を愛せしわれのため鐘打てりルドンの鐘楼守は

墓原に灰青の草しげりをり父祖の木乃伊にその根からまむ

裸祭り白きふどしは浄衣^{じやうえ}にて若さの撓^{しな}ふ音たかきかな

暝りつつ指頭つらぬく血を弾けば破れゆくソナタの古典形式

尾を追ひてまはる仔犬よ音符の輪きらきらしくて鳥の日だまり

岩棚に寝ころぶわれと海つぼめ日ねもす無縁に親しみあへり

今しばし怒漲の青波くづるるな禪^{ぜん}しめてわが泳ぎ入るべし

俯^{うつむ}といふ文字かなし朝まだきわが少年が夢をよぎれる

雪あかり白夜のごとし脱衣して兄弟はかたみに名を呼びあひし

この祭はかなしみ多し雪が疾り鬼が裸体であることなども

な笑ひそ脂^{あぶら}うきたる村人ら雪喰ふは飢ゑるのみにはあらぬ

一語一語降ることくにくふる雪の峠を越えつさらに歩まむ

われに似る子よ肉体をこそ恃^{たか}み生きる汝が悲運の強くあるべし

青嵐過ぎたり誰も知るなけむひとりの維新といふもあるべく

返すべき禮^{あや}ともことば生るる秋絶えて會ふことなけれど父よ

爾後父は雪嶺の雪つひにして語りあふべき時を失ふ

劇中劇のあやまちし間のごとくにも見つめ合ひ語らざりし終の日

出奔せし風の日のわれ面瘦せて悲哀に瀕しるしと思ふも

美しくあらねばむしる廢市たれ風の乾ける驛を背にせり

日表の芒しるたへ流れ去る時をとどめてひとしきり耀る

わが影の巨きくはあれ揺れはすれ大鴉とはならずしばし時過ぐ

青葦

綺語ならぬ言葉はありやエディプスの峠路の章讀みなづみつ

蠟涙をさらに溶かして燃え續くこの火はみづからを失はむため

秋到る空の縹へ差し入れて不犯の腕悲しまむとす

父三度祖父四度せし婚姻のさあれ切り落とす桔梗の青

父は背を向けて去りにき子の頬を平手うつべき朝なりしを

卓上に寒氣あつめて一盞と酔牡蠣置かれてある夕まぐれ

青葦の莖をうつせる水明り風過ぐるときましてかがよふ

抱くため腕あることを知らしめし縹の夜明け忘るるなけむ

青葦のそよぐを擁かな少年の世捨人たりし日につづく今

少年にして白髪をいただきしあけくれの消息を歌と呼ぶべし

わが春に餓はらひのことは賜ひたる人ありき海潮の盈つれば想ふ

潮風と攻防はげしかりし帆も疊まれたらむ夜の深みに

死ぬために命は生るる大洋の古代微笑のごときさきさなみ

住む場所のいつにもなき悲しみに砂漠清しと言ひしロレンス

まひるまに夢見る者は危しと砂巻きて吹く風のなかに竹つ

投げだされし少年の四肢なぞりたる白墨の上をわが轍過ぐ

海の邊のテラスの裸像石なれば年経て若し沖を望める

一步一步空の梯子をのぼりゆく墜ちなむ距離を擴げむとして

一瞬を捨つれば生涯を捨つること易からむ風に鳴る夜の河

悲しみを言葉に組めるカモフラージュ工人狂へ狂へと雪ふりやまず

大雪の中のしろたへ雷鳥をしばし想ひて眠りに入らむ

わが黙示まして顯示の悲しみは秋天ふかく放ちやるべし

白波の奔馬のごとく駆け来るをわれに御すべき力生まれよ

為せしより為さざりしこと思ひ浮かふ一夜しづけし立夏を迎ふ

月の光受けてきらめきるたりけり可視なる精神のごとき粗塩

鏡をば虚無の中枢に射し入れて星を得たりしエドモンド・ハーレー

涅槃より呼び戻すごと液晶画面の光の文字にタゴールを読む

壊されてあらはとなりし骨組のしばしは冷たき風を宿せる

冷涼と来たりて冷涼と去いにしもの妄執の影ぞその後のわれは

フレディ・マーキュリー死して昼の星 I will rock you, we will rock you.

襟元をすこしくづせり風入れておもふは汝おまかならず奪ふ

対向し走りきて危ふく離れあふオートバイ相寄らむ心のごとく

「青葦」以後

今に今を重ねるほかの生を知らず今わが視野の潮みづがね

空ゆ水へ入れる刹那にわが見たる像素・音素たたへたる青

音のなき音楽とおもふ水の界すばやくゆるく鱗ふりやます

春の日の杳き記憶のたちかへり舞踊手は水泡のうちに舞ふかも

汀には死面が浮きてゐたりけり手に取りてかぶらむとして失ひき

時かけて刻苦のあとを遺したる波濤ぞ切崖を打ちのぼりつつ

死さへ影を失ひて照る日表の白砂の反す光のうつつ

青年は臉を伏せてフロアの隅アンドロイドのやうに微笑む

くりかへし観てゐるLDウォールは乾く映像の表面にゐる

『波濤』

ふたたびは戻らぬ昨日を肯ひて彼はかく寂かなる微笑みを得つ

刻明に抽出されし壁の窓そこより出で入る風を見るべし

天を測る視線すずしき人あれど有限者の悲は払ひがたしも

死を宿し病むとも若き大雪の朝の光を友は告げくる

白はことばの謂 燦然と白花のひらく朝に目覚めつ

つつがなく消光しるる母あれば草の葉は饑けのごとくに靡く

ハザラ人にわれは似るといふ天に近き高地にて風を追ひるる民に

闇の奥に聳え立つものの気配あり樹とも沈黙とも呼び難くして

雑木々は雨後の光にけふりたち柔らかき浄衣ふはりとまとふ

歌の表記・ふりがなは原則として歌集に準拠しています。

春日井建の三冊の歌集は、『未青年』が作者二十一歳、『行
け帰ることなく』が三十一歳、そして『青葦』が十四年の月
日を置いて一九八四年に刊行されている。『夢の法則』（詩と
短歌の作品集）は一九七四年に出版されたが『未青年』と同
時期の作品である。（なおこの他に『水の蔵』という歌集が上
梓に至らないまま約十年を閑しつがある。）

ほぼ十年おきに出されて来た歌集には春日井の作風の劇的
な変化が如実に示されている。

『未青年』のもつ「現代の少年ジャン・ジュネ」のみずみず

しい背徳の抒情から一転、生存のはらむ暗黒を見据える第二
歌集には土俗への接近を見せる「鬼」の一連があり、歌への
回帰を果たした『青葦』では、年齢的な成熟が綺語を排した
落ち着きと抒情の豊かな広がりをもたらししている。

しかし春日井短歌には一貫してけつして曇ることのない
「見者」の明晰さがあり、またこの選出歌からも歴然として
いる、絶え間なく変化する美しい「水」のイメージがある。

大塚寅彦（おおつか・とらひこ）「中部短歌」会員